

# 保育者養成校と付属幼稚園の連携によるサーキット遊びの実施が 幼稚園児の運動に対する意欲に与える影響について

石 山 由 美

Research on the Practice of “Circuit Playing”

Yumi ISHIYAMA

## 要 旨

本研究では、保育者養成校と付属幼稚園の連携の元、日常の遊びの中だけでは経験できない体の動きが出来るような用具を用いた運動遊び（サーキット遊び）を園児に提供し、これらの遊びが運動遊びへの意欲にどのように影響するのかを明らかにする。併せて養成校の学生が、サーキット遊びの計画・実施を通して学びの視点を明確にし、体験的に理解できる授業方法の模索を試みる。そのために学生が立案したサーキット遊びを園児に提供し、指導を行う過程で幼児・学生・保育者に対して調査を実施した。その結果、サーキット遊びを活用することで園児が意欲的に運動遊びに取り組むことや、「頑張ったらできた」という経験から挑戦しようとする意欲を持って取り組むことが出来た。学生については、全ての学生が何らかの学修効果を感じ、今後の学習意欲につながった。

キーワード：サーキット遊び・運動遊び・保育者養成・幼稚園

## I. 研究目的

保育者養成校の学生にとって、卒業後保育者となった時、体を動かす遊びをどのようにとらえ保育の中に取り入れていくかは、必要不可欠な知識・技術である。一方、幼児教育現場の課題として、幼児の運動能力の低下が指摘されていることは、多くの研究調査で明らかにされている<sup>1)</sup>。例えば、日本小児保健協会の平成22年度の調査によると、2歳児以上のよく行う遊びについて、お絵かき・粘土・ブロックなどの造形遊びが75%、ごっこ遊びが68%と体を活発に動かさない遊びが占める割合が高い。特に遊びに占める「絵本」「テレビ・ビデオ」の割合は、平成12年の調査に比べて約2倍に増加している。こういったことから子どもを取り巻く状況として、活発に体を動かして遊ぶことが減少していることが分かる。

幼児期に喜んで体を動かして遊ぶことの重要性が幼児教育の現場でも再提起されているが、このことは子どもを育てる保育者の知識や技術に直接かかわってくる。しかし、保育者の今日的課題として、2005年の中央教育審議答申「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼稚園教育の在り方について（答申）」では、「近年は、幅広い生活体験や自然体験を十分に積むことなく教員等になっている場合も見られる。そのため、自らの多様な体験を取り入れながら具体的に保

育を構想し、実践することがうまくできない者、あるいは教職員どうしや保護者との良好な関係を構築することを苦手としている者も少なからずいるとの指摘もある。」ことが挙げられ、保育者自身の体験不足が指摘されている。筆者の勤務していた<sup>2)</sup>安田女子大学附属幼稚園（以下、附属幼稚園とする）の現状に目を向けると、喜んで戸外で遊ぶ子どもがほとんどであるが、十分に体を使った運動遊びや鬼ごっこなどの集団遊びには消極的であったり体の使い方が上手でなかったりする子どもの姿が見られる。また、用具を使った運動遊びを提供する際には、安全管理上、保育者が遊びについておく必要があり、一人担任では十分に遊ぶ時間を確保したり継続して遊びを提供したりすることが難しいため、用具を使った運動遊びをする機会が少ない。

そこで、本研究では保育者養成校との連携の元、附属幼稚園で日常の遊びの中だけでは経験できない体の動きができるような用具を用いた運動遊び（以下、サーキット遊びとする）を提供し、これらの遊びが喜んで体を動かす子どもの増加、意欲的に運動遊びに取り組むことへどのように影響するかを明らかにする。

併せて養成校の学生が、今までの学修を総合的に活用してサーキット遊びを計画し、実際に子どもと活動することで、学びの視点を明確にし、学生が体験的に理解できる授業方法の模索を試みる。

## Ⅱ. 研究 方 法

### 1. サーキット遊びの意義

子どもが運動をする機会は遊びや生活の場面で様々あるが、サーキット遊びは、いろいろな動きを楽しみながら経験できる、同じ用具でも子どもの運動能力に応じて柔軟な運動の仕方や遊び方ができる、友達と一緒に取り組むことができる、苦手な運動があっても遊びの選択の幅があり取り組みやすいなどの特徴がある。加えて、用具があることで刺激となり、普段体を動かして遊ぶことが少ない子どもにとって、興味を持って運動遊びに取り組むことができる環境になるであろうと予測される。

一方、学生が授業において学修した内容は多岐にわたるが、サーキット遊びは保育者として子どもの欲求や発達に合わせて遊びの提供の幅を広げられるようにすることや園にあるであろう用具を保育の中で活用できるようにするための学修としても向いている題材である。

以上の要素を踏まえて、学生が授業での学びを活かした保育の計画、実施する題材としてサーキット遊びを選択した。

### 2. サーキット遊びが子どもの運動に対する意欲に与える影響について

#### (1) 調査対象と方法

本研究では、先に述べたようなサーキット遊びの意義を踏まえ、安田女子短期大学保育科1年生149名の幼児体育Ⅱの授業の中で、学生が立案したサーキット遊びを附属幼稚園の園児に提供し、指導を行う過程で調査を実施した。

幼児体育Ⅱは、保育科の1年生全員が履修しており、1組から4組までクラス単位で授業を行っている演習科目である。サーキット遊びの計画・実施の前段階として、全員が前期の幼児体育Ⅰにおいて、授業担当者が立案の元、附属幼稚園において体操もしくは鬼遊びの指導を行っている<sup>3)</sup>。サーキット遊びの計画・実施については、クラスごとに学生がサーキット遊びの構成や指

導案を考え、付属幼稚園の生活時間に合わせ、好きな遊びの時間もしくは設定保育にて指導を行った。

サーキット遊びという意図した環境が子どもの運動遊びに対する意欲にどのように影響するのかを明らかにするため、【調査1】として次の項目について調査・分析した(表1)。

表1. 【調査1】に関する調査項目

項目	対象	方法	時期
【1-1】喜んで体を動かす姿・運動遊びに取り組む姿に関する子どもの実態把握	3歳児 68名 (男児34名 女児34名) 4歳児 69名 (男児31名 女児38名) 5歳児 69名 (男児33名 女児36名)	クラス担任に対するアンケート調査	5月上旬・7月中旬(1学期末)
【1-2】子どもの運動遊びへの意欲の変化	4歳児 63名 (男児31名 女児32名)	筆者による子どもへの聞き取り調査	11月22日
【1-3】子どもの運動遊びへの意欲の変化	4歳児 63名 (男児31名 女児32名)	筆者による子どもへの聞き取り調査	11月25日
【1-4】子ども自身のサーキット遊びへの評価	4歳児 63名 (男児31名 女児32名)	筆者による子どもへの聞き取り調査	11月25日
【1-5】担任による子どもの運動意欲の評価	4歳児 63名 (男児31名 女児32名)	クラス担任に対するアンケート調査	11月25日

## (2) 調査・分析の視点

クラス担任に対するアンケート【調査1-1】は、その調査項目を幼稚園教育要領「健康」のねらいと内容をもとに、担任によって評価の基準が変わらないよう評価の視点を設け<sup>4)</sup>、「①進んで戸外で遊ぶ」「②喜んで戸外で体を動かして遊ぶ」「③運動遊びに喜んで取り組む」の3点を評価項目として設定した。さらに調査対象となる付属幼稚園の子どもの姿を加味して、その分析視点を検討した。

例えば、付属幼稚園において喜んで体を動かして遊ぶ子どもがほとんどであるが、十分に体を使った運動遊びや集団遊びには消極的であったり体の使い方が上手でなかったりする様子が子どもの姿として見られた。ウサギに餌をあげることを楽しんでいたりと虫探しを楽しんでいたりと、進んで戸外で遊んでいる内容も多岐にわたる。こういった事実を踏まえると、戸外で遊ぶということに様々な要素が含まれるため、運動遊びに焦点を当てて表2のように評価項目を設定した。また本研究では、先の3項目に加え、「④小規模なサーキット遊びに喜んで取り組む」を加えた4項目で調査・分析を行う。

「小規模なサーキット遊び」とは、子どもが用具に慣れることを目的として筆者が行った様々な用具を使った運動遊びである。付属幼稚園では、巧技台や跳び箱、マットといった運動用具に触れて遊ぶ経験が少ない園児が多いため、学生がサーキット遊びを提供しても様々な体の動かし方をして楽しむことより、用具の扱い方に慣れることで精一杯になることが予想された。そのため、サーキット遊びに取り組むための前段階として、様々な用具に触れて慣れることを主な目的とし、1学期に計9回、13種類の用具を使って好きな遊びの時間に小規模なサーキット遊びを提供した。

表2. 【調査1-1】の評価項目と調査・分析の視点

調査項目	調査・分析の視点
①進んで戸外で遊ぶ	遊びは限定せず、進んで戸外に出て遊ぶことを楽しんでいる（小動物へのえさやり、栽培物の世話、虫探し、ブランコなど）
②喜んで体を動かして遊ぶ	戸外で体を動かす遊びに喜んで取り組んでいる（追いかけっこ、三輪車、ヘビジャンケンなど）
③運動遊びに進んで取り組む	戸外で運動遊びに喜んで取り組んでいる（鉄棒、のぼり棒、うんてい、縄跳び、ドッジボールなど）
④小規模なサーキット遊びに喜んで取り組む	小規模なサーキット遊びに、繰り返し喜んで取り組んでいる

次に、サーキット遊び実施前後で子どもの運動意欲にどのような変化があるか調査【1-2】【1-3】【1-4】、筆者による子どもへの一人一人への聞き取り調査を行うこととした（表3）。①の質問は、学生が行った設定保育におけるサーキット遊び実施前に行い、②③の質問はサーキット遊び実施後に行った。

また、学生が行った設定保育におけるサーキット遊びに意欲的に参加していたか否かについて、サーキット遊びに参加している子どもの様子から担任教諭にもチェックリスト形式で調査し調査【1-5】、子ども自身が楽しくサーキット遊びに参加できている感覚と担任から見た子どもが意欲的に参加する姿との違いを比較することにする。

表3. 子どもの運動意欲の変化

調査項目	調査方法	備考
①サーキット遊びをやってみたいか	筆者による子どもへの聞き取り	【1-2】
②サーキット遊びは楽しかったか	筆者による子どもへの聞き取り	【1-3】
③またサーキット遊びをしたいか	筆者による子どもへの聞き取り	【1-4】
積極的にサーキット遊びに参加していたか	担任教諭によるチェックリスト	【1-5】

### 3. サーキット遊びの計画実施が学生の学びの視点獲得と学修効果に与える影響について

#### (1) 調査対象と方法

養成段階の学生が実際に授業での学びから実践的指導を行い、振り返る過程を通して、学びの視点を明確にしなが、保育者としての視点を体験的に理解できる授業づくりを模索するため、【調査2】として、次の項目について調査・分析した（表4）。

表4. 【調査2】に関する調査対象と方法

項目	対象	方法	時期
【2-1】サーキット遊びへ向けた取り組みに関する学生の理解についての実態把握（サーキット遊びの子どもに対するねらいや自分の課題、課題達成のための準備、子どもの姿の予想について）	安田女子短期大学 保育科1年生 幼児体育Ⅱ受講者 149名	学生に対するアンケート調査	11月19日 11月29日
【2-2】サーキット遊び後の調査（ねらいや課題が達成できたか、準備は十分できたか、指導時の子どもの様子についての振り返り）	安田女子短期大学 保育科1年生 幼児体育Ⅱ受講者 149名	学生に対するアンケート調査	12月2日 12月13日
【2-3】学修効果に関する調査（学生のアンケートに記入した感想より）	安田女子短期大学 保育科1年生 幼児体育Ⅱ受講者 149名	学生に対するアンケート調査	12月2日 12月13日

## (2) 調査・分析の視点

【調査2】では、サーキット遊びを実施するにあたってのねらいや自分の課題、課題達成のための準備、子どもの姿の予想に関する学生の意識や視点を明確にするため、①～④（表5）の項目についてサーキット遊び実施1週間前に調査を行った。実施後に事前の意識・視点と比較し、振り返ることができるよう、その問いを対応させ、サーキット遊び実施前に左半分を記入し、実施後に右半分及び⑤を記入した。⑤については、学生の素直な感想や①～④の項目を活動の振り返りの視点にして、より総合的にサーキット遊びの取り組みについて振り返ることが出来るよう自由記述とした（表5）。

本研究では⑤を分析の対象とし、学生自身が感じた学修効果について読み取ることとした。読み取る視点としては大きく、(ア)「実践力や指導技術獲得に関するもの」、(イ)「保育者としての姿勢や意欲に関するもの」、(ウ)「子どもとのかかわりや子ども理解に関するもの」、以上の3点を今回の学修効果とし、関連した記述を読み取っていく。

表5. 学生に行ったアンケート

① 今回のサーキット遊びをする中での自分のねらい（課題）は何ですか。	⇒課題は達成できましたか。 (どちらかに○をつけてください) 達成できた ・ 達成できなかった
② 今回のサーキット遊びの子どもに対してのねらいは何ですか。	⇒ねらいは達成できましたか。 (どちらかに○をつけてください) 達成できた ・ 達成できなかった
③ ①②のねらいを達成するためには、どんな準備をしたらよいと思いますか。	⇒指導を終えて、十分な準備ができたと思いますか。 (どちらかに○をつけ、その理由も書いてください) ・ できた⇒できたと思う理由を書いてください ・ できなかった⇒何が足りなかったと思いますか。
④ 当日の子どもの姿の予想を書いてください。	⇒実際に、指導をしたときの子ども様子はどうか。何を喜んだか、自分の予想と違ったところなど、心に残った子どもの姿を書いてください。
⑤ 今回、付属幼稚園でサーキット遊びをして、自分の課題だと思ったことや反省、嬉しかったことなども含めて感想を書いてください。(自由記述)	

#### 4. 実践経過

本研究では、サーキット遊びの実践を挟み、事前・事後に【調査1】【調査2】を実施した。その時期と経過は以下の表6の通りである。

表6. 実践の経過と実施時期

時期	実践の経過	備考
5月上旬、7月上旬	付属幼稚園において、1学期の子どもの運動遊びへの取り組みの実際を調査する。	調査【1-1】
10月～11月中旬	学生への事前指導として、授業で学習したサーキット遊びやそれまでの学修内容を総合的に取り入れたサーキット遊びの立案を行う。サーキット遊びの立案と合わせて、保育指導案を作成する。	
11月19日 12月3日	筆者と付属幼稚園教員とでサーキット遊びについて、学生の立案を元に打ち合わせを行い、共通理解を図る。	
11月22日 12月4日	サーキット遊び実施前に、子どもの状況を調査し、実施後の状況と比較をすることでサーキット遊びが介入したことによる、子どもの運動遊びへの意欲の変化を調査する。	調査【1-2】
11月19日 11月29日 (サーキット遊び実施1週間前にアンケート配布)	サーキット遊びを実施するにあたっての、ねらいや自分の課題、課題達成のための準備、子どもの姿の予想について学生にアンケートを行い、学修のめあてや視点を明確にする。	調査【2-1】
11月21日	子どもへの聞き取り調査をする。	調査【1-3】
11月25日 12月6日	サーキット遊びを実施する。	
11月25日	子どもへの聞き取り調査をする。	調査【1-4】
11月25日 12月6日	サーキット遊び実施中、子どもが意欲的に遊びに参加できたか否かについて、担任教諭にチェックリストを記入してもらう。	調査【1-5】
11月25日 (サーキット遊び実施後)	子どもへの聞き取り調査と実施前の子どもの状況の調査、担任のチェックリストを比較し考察をする。	調査【1-3】 【1-4】【1-5】
12月2日、13日 (サーキット遊び実施後)	学生のアンケート調査から、学生の学修効果について考察する。	調査【2-2】 【2-3】

### Ⅲ. 学生によるサーキット遊びの計画と実施

#### 1. サーキット遊びの提供によって期待される効果

前期における幼児体育Ⅰでの経験を活かして、幼児体育Ⅱではサーキット遊びの立案、指導案の作成、用具などの準備を学生が協力して進めていくこととした。付属幼稚園でのサーキット遊びの計画前に、大学の授業の中でサーキット遊びの基本的な理論と用具の扱い方について1コマ、実際のサーキット遊びの授業を1コマ行った。授業では用具の扱い方、用具を組み合わせる様々な動きが楽しめるようにすること、安全への配慮、イメージを持ってサーキット遊びをすることでより動きを楽しめるようにすることなどを学修した。また、用具をどのように使うかによって様々な体の動かし方ができることや普段の遊びの中では経験しにくい動きを経験することが出来ること、友達と一緒に取り組むことで運動遊びに苦手意識がある子どももやってみようとする可能性があること、少し頑張ればできることに挑戦することでより意欲的に取り組めることを実際に子どもとサーキット遊びをする中で期待される効果として授業やその後の立案段階で学生とのやり取りの中で伝えていった。

付属幼稚園との連携による授業は、学生にとっては、学修したことを実践する貴重な体験の機会となる。このことについては、拙稿、安田女子大学紀要第41号「保育者養成校（短期大学）と



付属幼稚園との連携による幼児教育現場での幼児体育Ⅰの実施 第1報」「保育者養成校（短期大学）と付属幼稚園との連携による幼児教育現場での幼児体育Ⅰの実施 第2報」で述べたとおりである。

以上のことから、幼児体育Ⅱでは、学生が授業の中での学びと教育実習や前期の付属幼稚園での授業を実施した経験など従前の学修経験を踏まえ、クラスごとに学生がサーキット遊びの構成や指導案を考え、付属幼稚園の生活時間に合わせ、好きな遊びの時間もしくは設定保育にて指導を行う機会を設けている。

本研究ではこういった一連の過程をふまえて、学生の学修効果と園児の運動意欲の変化を調査・分析している。

## 2. サーキット遊びの立案の経過と実践

各クラス、グループごとにどのようなサーキット遊びをするか全員で考え、環境構成図と指導案を作成した。10月から取り組み始め、担当教員である筆者とやり取りをしながら進め、環境構成図と指導案が完成するまでにおおよそ2か月を要した。

また、学生の環境構成図と指導案が完成してから、付属幼稚園と打ち合わせを計2回行った。付属幼稚園との打ち合わせでは、学生の立案を元にサーキット遊びの内容や学生のしたいことを付属幼稚園教員と共通理解できることを目的として進めた。その経過は表7の通りである。

表7. サーキット遊びの立案の経過と実践

時期	実践の経過
9月20日～10月7日の間の2日	幼児体育Ⅱの中で2回サーキット遊びについての授業を行う。 2回目のサーキット遊びの授業において、付属幼稚園でサーキット遊びを指導することを伝達する。
10月11日、 10月28日	4回目の授業時に、各グループで考えたサーキット遊びの見取り図を提出する。
10月11日～11月29日	サーキット遊びの見取り図の修正を筆者とやり取りをしながら進める。(計4～7回)
11月4日～11月15日	見取り図の構成がおおよそ決まったら、指導案を作成する。 筆者とのやり取りをしながら指導案を修正する。
11月4日～12月5日	指導案の作成と並行して、サーキット遊びに必要な道具を作成する。
11月4日～12月5日	サーキット遊びで子どもに指導する体操を考え、練習をする。
11月15日 11月29日	サーキット遊びの指導案を完成させる。
11月18日	学生の指導案をもとに筆者と付属幼稚園教員と打ち合わせをする。
11月22日	付属幼稚園へサーキット遊びに必要な用具を搬入する。
11月25日 12月6日	サーキット遊びを指導する。
12月6日	サーキット遊び指導後、使用した用具を搬出する。

学生が行ったサーキット遊びの内容については表8の通りである。どのクラスの学生も子どもが喜んで取り組むことが出来るように内容や用具の組み合わせを工夫すること、年齢に応じた内容にすること、子どもなりにめあてをもって取り組むことが出来るようにすること、普段の園生活では経験できない体の動かし方ができることをサーキット遊びの立案の視点として取り組んだ。

表8. サーキット遊び実施計画

実施日	時間	立案をしたクラス	対象	サーキット遊びのテーマ	場所
平成25年 11月25日(月)	9:00~10:30 好きな遊びにおいて	保育科1年 2組37名	全園児	ワンダーランド	遊戯室
平成25年 11月25日(月)	10:40~12:10 クラスの活動(設定保育)	保育科1年 1組19名	年中4歳児 D組	安田オリンピック	遊戯室
平成25年 11月25日(月)	10:40~12:10 クラスの活動(設定保育)	保育科1年 1組19名	年中4歳児 E組	勇者になろう!	体育館
平成25年 12月6日(金)	9:00~10:30 好きな遊び	保育科1年 4組37名	全園児	忍者の修業	遊戯室
平成25年 12月6日(金)	10:40~12:10 クラスの活動(設定保育)	保育科1年 3組18名	年長5歳児 F組	忍者の修業	遊戯室
平成25年 12月6日(金)	10:40~12:10 クラスの活動(設定保育)	保育科1年 3組19名	年長5歳児 G組	安田オリンピック	体育館

## IV. 結 果

## 1. サーキット遊びが喜んで体を動かす態度や運動遊びへの意欲に及ぼす影響【調査1】

## (1) 運動遊びへの取り組みの実態と小規模なサーキット遊びが及ぼす影響

大学付属幼稚園の園児の運動遊びへの取り組みの実態として、担任によるアンケートを行ったところ【調査1-1】、次の結果が得られた(表9, 10)。

この実態調査結果の中で、着目した点は3点ある。第一に、一学期末にはB組を除くすべてのクラスで進んで戸外で遊ぶ子どもが減少している。年長児の減少率が著しい。気温が高くなった、園生活や新しいクラスに慣れて遊びの幅が広がったなど外遊びが減少した理由は多々考えられるが、幼児期に必要な経験や子どもの心身の発達を考えると着目すべき点である。

第二に、進んで戸外で遊んでいるが運動遊びに取り組んでいる子どものパーセンテージが低い点である。戸外で遊んでいても、十分に体を動かして遊んでいないのではないかと推察される。また、運動遊びに取り組んでいる子どもの率が、どのクラスもクラスの子どもの3分の1も取り組んでいないという結果になっている。

第三に、小規模なサーキット遊びをすることに慣れてきた1学期末(表10)では、③運動遊びに進んで取り組む子どもよりも④小規模なサーキット遊びに喜んで取り組む子どもの方がほとんどのクラスで多くなっている。つまり、普段は運動遊びをしていない子どもが、小規模なサーキット遊びには喜んで取り組んでいるということである。

表9. 運動遊びへの取り組みの実態調査(5月上旬調査)

調査項目 学年・クラス(在籍数)	①進んで戸外 で遊ぶ	②喜んで戸外 で体を動かし て遊ぶ	③運動遊びに 進んで取り組 む	④小規模なサ ーキット遊び に喜んで取り 組む
年少3歳児A組(22)	59%	14%	5%	9%
年少3歳児B組(23)	52%	22%	13%	35%
年少3歳児C組(23)	74%	52%	4%	22%
年中4歳児D組(35)	66%	23%	23%	3%
年中4歳児E組(34)	47%	6%	15%	12%
年長5歳児F組(34)	80%	31%	23%	37%
年長5歳児G組(35)	69%	49%	14%	3%



表10. 運動遊びへの取り組みの実態調査（1学期末調査）

学年・クラス（在籍数）	①進んで戸外で遊ぶ	②喜んで戸外で体を動かして遊ぶ	③運動遊びに進んで取り組む	④小規模なサーキット遊びに喜んで取り組む
年少3歳児A組（22）	50%	36%	36%	55%
年少3歳児B組（23）	83%	57%	0%	48%
年少3歳児C組（23）	57%	43%	26%	39%
年中4歳児D組（35）	14%	9%	3%	26%
年中4歳児E組（34）	41%	15%	18%	35%
年長5歳児F組（34）	0%	11%	3%	20%
年長5歳児G組（35）	3%	9%	11%	17%

## (2) 子どもの運動意欲の変化 【調査1】

子どもの運動意欲にどのような変化があるか、子どもへの一人一人への聞き取り調査を年中4歳児D、E組に対して行った。質問に対して「はい」と答えたものを、パーセンテージで記している（表11）。①の質問は、11月25日に行った設定保育におけるサーキット遊び実施前に行い、②③の質問はサーキット遊び実施後に行った。

また、11月25日に行った設定保育の時間におけるサーキット遊び実施中、子どもが意欲的に遊びに参加できたか否かについて、年中4歳児2クラスを対象に、担任教諭が評価をした（表12）。

サーキット遊び実施前にはD組では12%、E組では20%の子どもがサーキット遊びをしたくないというマイナスの気持ちを持っていたことが分かる（表11）。しかし、サーキット遊び実施後には、100%の子どもがサーキット遊びは楽しかったと答えている。

表11. 子どもの運動意欲の変化

	①サーキット遊びをやってみたいか	②サーキット遊びは楽しかったか	③またサーキット遊びをしたいか
年中4歳児D組（33人）	88%	100%	94%
年中4歳児E組（30人）	80%	100%	97%

表12. 担任教諭による運動意欲の評価

	積極的にサーキット遊びに参加していたか
年中4歳児D組（33人）	97%
年中4歳児E組（30人）	93%

## 2. 学生の感想からみる学修効果について 【調査2-3】

アンケート⑤の自由記述の感想から、この取り組みを通して学生自身が感じた学修効果について読み取った。(ア) 実践力や指導技術獲得に関するもの、(イ) 保育者としての姿勢や意欲に関するもの、(ウ) 子どもとのかかわりや子ども理解に関するもの、以上の3点を学修効果を読み取る視点とした。

表13. 学生が感じた学修効果の総件数

学修効果を読み取る視点	件数 (%)
(ア) 実践力や指導技術獲得に関するもの	233件 (49%)
(イ) 保育者としての姿勢や意欲に関するもの	154件 (32%)
(ウ) 子どもとのかかわりや子ども理解に関するもの	88件 (19%)
	計 475件 (100%)

筆者が読み取った学修効果は、(ア) 実践力や指導技術の獲得に関するものが233件と一番多く、(イ) 保育者としての姿勢や意欲に関するものが154件、(ウ) 子どもとのかかわりや子ども理解に関するものが88件となった(表13)。具体的な学修効果の内訳については、図1～3で示したとおりである。

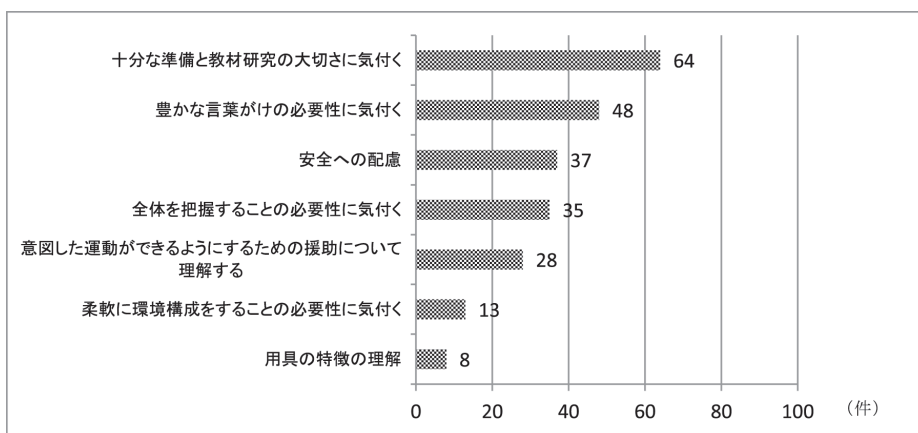


図1. (ア) 実践力や指導技術の獲得に関する学修効果

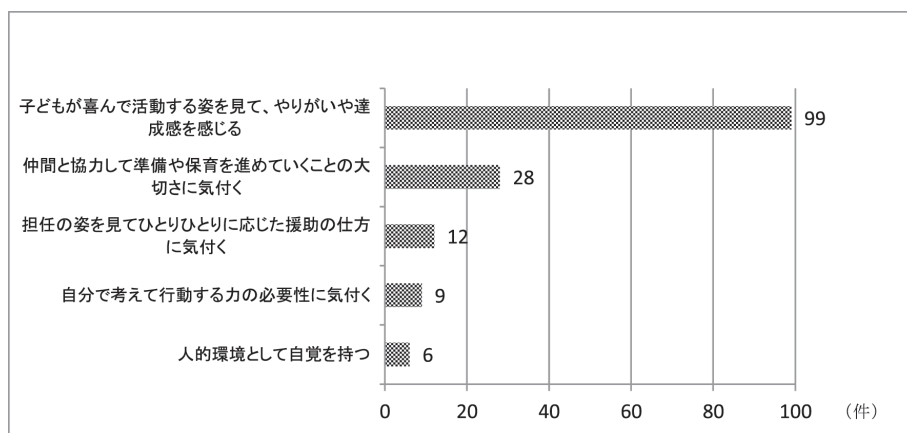


図2. (イ) 保育者としての姿勢や意欲に関する学修効果

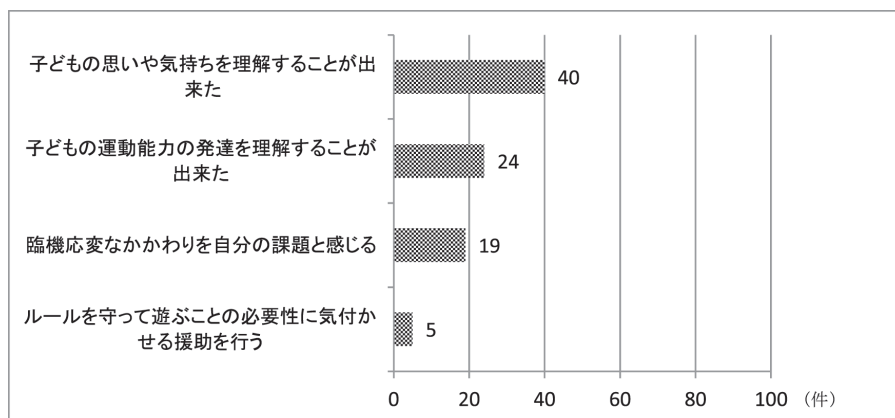


図3. (ウ) 子どもとのかかわりや子ども理解に関する学修効果

## V. 考 察

### 1. 子どもの運動意欲の変化について

子どもへの聞き取りと比較してみると(表11, 12), 子どもは楽しんではいたが担任教諭は意欲的ではなかったと捉えた子どもがいた。この時間は楽しく参加していたであろうことが、子どもへの聞き取りから分るが、子どもの楽しかったという感覚と担任教諭が目指す意欲的にサーキット遊びに取り組む姿との間にズレがあることが推察される。

また、表9と表10を比較してみると、1学期末に行った小規模なサーキット遊びには30%前後の子どもが喜んで取り組んでいた。つまり、70%近くの子どもは自分からは参加していない、もしくは遊んではみたが短時間しか遊ばなかったと考えられる。しかし、その70%近くの子どもも、学生が提供した大規模なサーキット遊びでは全員が楽しかったと回答をしている。

このような結果となった理由は2つ考えられる。1つ目は、小規模なサーキット遊びは好きな遊びの時間で行っていたため、全く触れないままだと「楽しい」と感じる経験にならず、自分から参加しようという気持ちにならなかった。2つ目は、設定保育というクラスみんなで取り組む活動だったため、友達が楽しむ姿を見ることや友達と一緒に活動することで楽しむことができたからではないだろうかと考えられる。

### 2. 学生の感想から見る学修効果について

それぞれの学修効果の内容についてみていくと(表13), 学修効果の件数としては、(ア)実践力や指導力の獲得に関するもの、(イ)保育者としての姿勢や意欲に関するもの、(ウ)子どもとのかかわりや子ども理解に関するものの順で学修効果が見られた。(ア)では、十分な準備と教材研究の大切さに気付いた学生が多かった(図1)。件数では64件だが、準備を進めていく中で苦勞をしたり失敗をしたりし、準備の大変さを感じていたが実際に子どもと活動をし、子どもが喜んで活動できたことで丁寧に準備をしてよかったと感じた学生と、自分たちが意図したように子どもが活動できなかつたり子どもにうまくかわれなかつたりしたことでもっと準備をしておけばよかったと反省をした学生とに分かれていた。また、いくら予想をしても予想とは違う

ことが起こったりとっさに対応することが難しかったりし、豊かな言葉がけの必要性に気付いた学生が多かった。「安全への配慮」や「意図した運動ができるようにするための援助に気付く」、「用具の特徴の理解」はサーキット遊びをしたからこそ気付くことが出来た学修効果であろう。

(イ)では、「子どもが喜んで活動する姿を見て、やりがいや達成感を感じた」という旨をアンケートに記述している学生は149名中99名いた(図2)。学修体験が技術や知識理論の獲得だけではなく、学修への意欲ややりがいにつながったことは、今後学び続けていく原動力になるのではないかと思われる。実際の保育能力の向上を支える意欲の部分に関わることを考えると、学修効果としての意味は大きいですが、何かができるようになった、理解できたといった直接的な学修効果とは質が異なる。

小原らは著書の中で、「保育者の専門性として身につけるべき『保育実践力』は、いくつかの核となる知識・技術、さらには保育に向かう姿勢を総合したものであると同時に、保育実践の中で、自己の知識や技術を常に再構成していくプロセスを含むもの<sup>5)</sup>と述べている。このことは本研究において、保育に向かう姿勢や子ども理解などの知識・技術と連動した大学の授業を通しての実践経験が、(ア)の実践力や指導技術の獲得に関する学修効果を感じた学生が多くなったという結果として表れたと言える。

また、他の「仲間と協力して準備や保育を進めていくことの大切さに気付く」「担任の姿を見てひとりひとりに応じた援助の仕方に気付く」「自分で考えて行動する力の必要性に気付く」「人的環境として自覚を持つ」の合計55件については、従前の学修や教育実習の中で積み重ねてきており、今回の体験の中で再認識したと考えられる。また、グループで立案や準備を行ったことで、仲間と協力をするものの大切さを感じた学生が多かった。これは、今後保育者となった時に、仲間と協働して保育を進めていくために必要な経験である。

(ウ)では、特に、自分たちが計画したサーキット遊びの中で、それまでは想像でしかなかった子どもの姿が、かかわることを通して「子どもの思いや気持ちの理解」や「運動能力の発達の理解」につながった(図3)。

また、サーキット遊び実施中に、始めはできなかった運動を繰り返し取り組んだり学生が援助したりしてできるようになった子どもの姿がどのサーキット遊びの中でも複数見られた。出来ないからあきらめるのではなく、出来るようになりたいからあきらめないという子どもの思いを理解し、運動能力といった目に見えるものだけではなく、それを発達させるための意欲や動機といった目に見えない部分に気付くことが出来たことが、学生の自由記述より読み取ることが出来た。

## VI. ま と め

今回の学生によるサーキット遊びの実施において、子どもに対しては2つの成果があった。1つ目は、サーキット遊びに参加した子どものほとんどが「サーキット遊びは楽しい」と感じる経験となったことである(表11)。普段の遊びの中では、意欲的に体を動かして遊ぶことが少ない子どもが、サーキット遊びという場を提供することによって、体を動かして遊ぶことの楽しさを感じ、意欲的に取り組むことができた。2つ目は、「頑張ったらできた」という経験から、自分の力よりも少し難しいことに挑戦しようとする意欲を持って取り組むことが出来たことである。

学生にとっては、子どもの姿を予想し丁寧に準備をすることの大切さや仲間と協力をして準備

や保育を進めていくこと、子どもの様子に合わせて柔軟に対応すること、子どもの言葉や表情から子どもの思いを汲み取り言葉がけをすること、笑顔で子どもと接することなど保育の中で大切なことに気付く経験となったとアンケートの感想の中で記述をしていた学生が多かった。また、自分たちが計画したサーキット遊びに、子ども達が実際に喜んで取り組む姿を見たことにより、達成感を持ち、今後の学修への意欲につながった。これらの学びは養成校と付属幼稚園との連携の元で、長期間にわたる準備等を含めた取り組みの中だからこそ得られたものであり、授業として一定の学修効果を確認することが出来た。

継続してこの取り組みを進めていくことで、今後の園児の運動遊びなどへどのような影響を及ぼすのかを今後の課題としたい。

## Ⅶ. 参 考 文 献

- 1) 岩崎洋子・吉田伊津美・朴淳香・鈴木康弘, 『保育と幼児期の運動遊び』, 萌文書林, 2008
- 2) 衛藤隆, 「幼児健康度に関する継続的比較研究」『平成22年度総括・分担研究報告書』, 日本小児保健協会, 2011
- 3) 中央教育審議会, 「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について(答申)」, 1997
- 4) 文部科学省, 『幼稚園教育要領(平成20年度告示)』, 2008
- 5) 文部科学省, 『幼児期運動指針ガイドブック』, 2013
- 6) 文部科学省, 「体力向上の基礎を培うための幼児期における実践活動の在り方に関する調査報告書」, 2011
- 7) 吉田伊津美・杉原隆・森司朗, 「幼稚園における健康・体力づくりの意識と運動指導の実態」, 『東京学芸大学紀要, 教育科学系』, 58, 2007, pp.75-80

### 注

- 1) 以下の研究・調査報告等があげられる
  - ・衛藤隆, 「幼児健康度に関する継続的比較研究」『平成22年度総括・分担研究報告書』, 日本小児保健協会, 2011
  - ・民秋言・穂丸武臣編著, 「新 保育ライブラリ 保育の内容・方法を知る 保育内容健康(新版)」, 北大路書房, 2014
  - ・文部科学省, 「体力向上の基礎を培うための幼児期における実践活動の在り方に関する調査報告書」, 2011
  - ・文部科学省, 『幼児期運動指針ガイドブック』, 2013
- 2) 平成24年度より, 安田学園の総合学園の特徴を生かした学内人事交流を行い, 筆者は, 安田女子大学付属幼稚園から安田女子短期大学保育科へ着任した。
- 3) 幼児体育Ⅰを履修して2か月足らずの時期に, 付属幼稚園において授業を実施した。子どもの実態に合わせた立案が難しいため, 筆者が保育案を立案し, それをもとにして学生が台本を考え, 指導を行った。
- 4) 幼稚園教育要領解説, 第2節各領域に示す事項, 1 心身の健康に関する領域「健康」, 1 ねらい(2)には, 「自分の体を十分に動かし, 進んで運動しようとする」とあり, [内容](2)「いろいろな遊びの中で十分に体を動かす。」(4)「様々な活動に親しみ, 楽しんで取り組む」とある。つまり幼児が, 興味を持って活動に取り組む中で十分に体を動かせることや活動を楽しむことで心や体を十分に動かすことの必要性が示されている。
- 5) 小原敏夫・神蔵幸子・義永睦子編著, 『保育・教職実践演習—保育者に求められる保育実践力—』, 建帛社, 2013, p.13, ℓ.21 ~ 24

[2014. 9. 25 受理]